

## 選評

『情熱が大事』

審査委員長 清水 信（しみず まこと）

日本のロータリークラブ発足は一九二〇年だが、二〇〇五年児童詩コンクールの選考会（二月二十三日）は、世界のロータリークラブが百周年の記念日に当たると伺った。鈴鹿西ロータリークラブ創立二十周年記念行事の一環としての児童詩コンクールの応募状況が、昨年の二七〇〇点と並んで、今年も二六四三点を数えて、主催者側のご努力は勿論、その強い反響はうれしくも目出度いことであった。

このコンクールの突出した特長は、対象を四年生、五年生にしぼったことであつた。反抗期は成長途上に誰もが味わうハシカのようなものであるけれども、小学校四、五年生といえば、ごくフツウの反抗期であり、それが中学二、三年生となると、少しおくと言われ、更に高校生の一、二年生になって、やっと芽生えるのは、ぐずの反抗期といわれる。

第一期の反抗期に焦点を合わせて、詩作を求めるとというのが、凄いアイデア（発想）である。企画なされた実行委員会の視角が冴えている。

詩のコア（核）は、情熱である。反抗もまた一つの重要な情熱の姿である。詩は論理や叙述や説明を必要としない。情熱や情緒や感情こそが、大事な文芸である。

少し難しいことを言ったが、受賞作の殆どが平明な作品である。しかし、良く読んでいただくと、批判や反抗を含んだ情熱が基盤にある作品が、選ばれていることに気付くであろう。

家族、友情、スポーツ、自然、ペット、草、本、虫、魚、宇宙、旅行、乗り物、学校、それぞれをモチーフ（題材）にしても、そこに少しばかりの批評精神が芽生えていることが分かつてもらえるだろう。それが、成長のプロセス（過程）を跡付ける大事な要素なのである。

優秀作と音楽というコンビネーションが成功した昨年と並んで、絵画や写真や習字などのコラボレーションが、今後は考えられていいだろう。また作品等の教育現場での利用が積極的に望まれる。

文芸評論家。小林秀雄・萩原朔太郎の薫陶を受け、「当世文人氣質」で第三回近代文学賞受賞。名古屋で「北斗」を創刊、多くの評論・小説を発表。同人雑誌センター主宰。著作に「清水信文学選」（全一〇一卷）ほか多数。小説・新聞・雑誌の文芸評論、文芸講演などで活躍。  
鈴鹿市在住。